

【教育報告】

中学校でのオンライン英語学習プログラム導入の成果と課題

畠 山 均・里 梨佐子・脇 山 祐一郎

The Effects and Issues of Introducing an Online English Learning Program in a Junior High School

Hitoshi HATAKEYAMA, Risako SATO, Yuichiro WAKIYAMA

要 約

純心中学校では2017（平成29）年度、インターネットを利用したマンツーマンの英会話レッスンを提供している（株）レアジョブと提携し、2年生全員が前期（5～7月）に、フィリピン大学の学生を中心とする講師陣と英語でのコミュニケーションをオンラインで行うことにより英語コミュニケーション能力の向上に取り組んだ。この取り組みは長崎純心大学英語情報学科において2013（平成25）年度から大学1年生を対象に行われている同英語コミュニケーションレッスンを受けて純心中学校でも実施されたものである。この取り組みは英語コミュニケーション力の向上を直接目指してはいるものであるが、同時に生徒の英語学習意欲を高める貴重な機会と捉え実施された。

本稿では、今回初めて実施したオンライン英語学習プログラムの成果を、リスニングテストのスコアとの関連、英語学習意欲に関するアンケート調査の結果、生徒へのインタビュー調査から検証し、オンライン英語学習プログラムが中学生の英語学習意欲向上にどのような影響をもたらしていたかを考察する。

キーワード：オンライン英語学習、英語学習意欲、リスニングテスト、自己評価

1. はじめに

純心中学校では2年生を対象に英語コミュニケーション力の向上と英語学習へ高い動機付けを図ることを目指して2017（平成29）年度、appear.in によるマンツーマン英語学習プログラムを導入した。本稿ではその実施方法、成果、そしてこれからの課題を報告する。

2. オンライン英語学習プログラムの概要と特徴

長崎純心大学英語情報学科が(株)レアジョブ¹⁾と提携し、2013年度から導入しているオンライン英語学習プログラムはスカイプ(インターネット電話ソフト)を通してフィリピン人講師との1日25分間の英語コミュニケーションのレッスンを受講するものである。

レッスンはパソコン、iPad、スマートフォンがあれば場所を問わず毎日午前6時から深夜午前1時まで受講できる。レッスンは習熟度別に生まれ、発音のチェックなどの初歩的なものから自由なテーマでのディスカッションという高度なものまで学習者のレベルやニーズに合わせて受講できる。講師はフィリピン大学の学生および卒業生を中心に約4000名が登録されている(www.rarejob.com/about/tutor/)。

このプログラムの英語教育上の利点は下記の5点にまとめることができる(姫野、2013)。

- (1) 学習者と講師が一对一で行うマンツーマンレッスンであるから、学習者は周囲に遠慮することなく、また時間的に自分が好きなだけ話しをすることができ、また疑問点があればその場で質問することができる。
- (2) レッソンの受講時間帯の制約がない。早朝でも深夜でもできる。
- (3) 通学がいらぬ。場所を問わない。自宅でも大学でもどこでもできる。
- (4) レッソンを100%自分用にカスタマイズできる。
- (5) 「話す」「聴く」「読む」「書く」の4技能をすべて学べる。

本稿で報告する純心中学校での取り組みは長崎純心大学英語情報学科での5年間にわたる実施の成果を基礎に実施されたものである(畠山、2017)。

3. 導入の目的

純心中学校2年では英会話授業を週1回実施している。普通学級を二つに分け、各クラス15～20名の授業であり、検定教科書を用いての日本人教師のみによる通常の英語授業より英会話の授業では英語使用の機会が多い。しかし2020年度に始まる大学入試の新システムの中でも4技能のバランスよい英語力が一層求められていく中で、「話す」「聴く」技能を向上させるためにフィリピン人講師と生徒が1対1で英語を活用できる本プログラムは通常の英会話授業に加えてより一層有効であると考えられる。予想される効果は以下の2点にまとめることができる。

- (1) 学習者が英語でコミュニケーションすることを通して学習者が英語を話すことに「慣れ」、英語を話すことを「楽しく」感じるようになり、それによって「英語を話すこと」に対する「心理的抵抗感」を軽減する。
- (2) 「話す」「聴く」を中心とする英語でのコミュニケーション能力を向上させる。

4. 実施内容（授業内容）

純心中学校2年では検定教科書を扱う外国語（英語）が週4回、CALL教室での多聴多読授業が週1回、英会話授業が週1回、アドバンスコース選択者の授業が週1回実施されている。今回は中学2年で英会話以外の全ての英語授業を担当している里教諭が、CALL室での多聴多読授業の一部を活用し、5月に週1回3週連続、7月に週1回2週連続の合計5回、オンライン授業を担当した。長崎純心大学英語情報学科の教職課程履修学生5名のサポートを受けた。

教材は担当者が事前にレアジョブのホームページからダウンロードしたPDFファイルを生徒の人数分印刷して配布した。25分間のレアジョブ実施を挟み、空き時間はその教材を用いて予習と復習にあてた。

教材にはレアジョブオフィシャル教材の日常英会話レベル2、チャプター1『自己紹介をしてみよう』のUnit1～Unit5を使用した。それぞれUnit1「自分のことを紹介しよう!」、Unit2「家族のことを紹介しよう!」、Unit3「家について紹介しよう!」、Unit4「家の近所のことを紹介しよう!」、Unit5「チャプター1のまとめ」というタイトルがあった。

A4サイズの教材がいずれも10～12枚、それぞれ9つの演習によって構成され、表紙でもある演習1「絵を見て答えよう」ではカラーの挿絵を英語で自由に描写する、演習2「今日学習する単語」では語彙と例文の導入、演習3「話してみよう」ではモデル例文の練習、演習4以降は、文法的な理解を助ける練習のためのページも若干あるが、主として実際の自己紹介に役立つ諸活動と定着のための練習に充てられていた。最初のページに関しては、講師とのやり取りで色彩が問題になる場合のためにレーザープリンターを用いカラー印刷したが、それ以外は白黒で印刷した。

オンライン上のフィリピン人講師は毎回別の方が担当するということだったが、生徒によっては複数回同じ講師にあたる場合もあった。講師は生徒の英語力に応じて教材を使用し、生徒とのやり取りを進め、教材のすべてを使い切るというよりも、時間的な制約と生徒の英語力に応じて臨機応変に授業を行っていた。生徒たちは初回はやや緊張気味で、ネット回線の不調、カメラやヘッドセットなどパソコン周辺機器の不調も重なってぎこちない様子も見られたが、回を重ねるごとに楽しみながらより積極的にオンライン授業に取り組むようになり、そうした変化も印象的だった。

授業に際しては授業担当者の里の他、長崎純心大学英語情報学科の教職課程履修者5名も指導にあたり、オンラインレッスンの終了後、授業の終了時間まで内容の復習をグループごとに行った。学んだばかりの表現をすぐに活用し、定着させる効果が大きかったと思われる。若い大学生の指導に生徒達も協力的に楽しく学ぶことができた。

なお評価に関しては、今回は試験的なオンライン授業の実施であり、パソコンの不調またネット回線の不調で十分授業を受けられなかった生徒たちも複数あったため、通常の成績評価には反映させなかった。

5.1 成果(1) プログラム実施前後でのリスニングテストの変化

オンライン授業の効果を確認するため本プログラムの開始前の5月上旬(以下5月テストとする)と実施後の7月中旬(以下7月テストとする)にそれぞれ英検3級程度のリスニング問題30問(30点満点)に取り組ませ、リスニング力の変化を調べた。5月テストと7月テストは同レベルの別問題で実施した。受験者数は69名であった。

その結果は5月テストの平均点は12.51(標準偏差5.034)、7月テストの平均点15.30(標準偏差5.077)であった。5月テストと7月テストの平均値の差を有意水準5%で両側検定の t 検定により検討した。その結果、 $t(68) = -6.226$ 、 $p < .01$ であり、平均値の差は有意であった。つまり5月テストと7月テストの結果を比べた時、明らかに7月テストの点数の方が良いということが統計的にも確かめられ、リスニングテストの点数から見る限り全体のリスニング力の向上が見られた。

以上のような平均点の向上がオンライン授業のみの効果であると判断することは難しい。6月はオンライン授業は実施しておらず通常の授業のみが実施された。通常授業の効果という点も加味する必要がある。しかし、わずか5回(1回25分)の授業でのこの向上は講師とのマンツーマンの学習がリスニング力、引いてはスピーキング力の向上にはかなり効果的である可能性を示唆しているとも考えられる。今後こうした実践結果の継続的検証が望まれる。

5.2 成果(2) プログラム実施前後での学習者の英語学習意欲の変化

学習者の英語学習に対する意欲に変化が見られたかどうかを検証するためにレアジョブが作成した「学習意欲アンケート」をプログラム開始前の5月と終了後の7月に実施した。以下、5月のアンケートを「5月調査」、7月のアンケートを「7月調査」とする。

アンケートの質問は8項目で、それぞれの質問項目について4つの選択肢から最も適当と判断した選択肢を選ぶ形式である。以下に質問項目と選択肢を記す。

質問1 外国人と話すことに自信はあるか

1. ある 2. 多少ある 3. あまりない 4. 全くない

質問2 外国人とのコミュニケーションに不安があるか

1. 非常にある 2. 多少ある 3. あまりない 4. 全くない

質問3 外国人とのコミュニケーションが好きであるか

1. とても好き 2. まあまあ好き 3. あまり好きではない 4. 嫌い

質問4 将来(英語を)話せるようになりたいか

1. になりたい 2. 少しになりたい 3. あまりなりたくない 4. 全くなりたくない

質問5 留学や海外研修に行きたいか

1. 非常に行きたい 2. まあまあ行きたい 3. あまり行きたくない
4. 全く行きたくない

質問6 外国人と話す時、相手を理解できるか

1. 不自由なく理解できる 2. まあまあ理解できる 3. あまり理解できない
4. 全く理解できない

質問7 外国人と話すとき、文法や語彙を使えるか

1. 不自由なく使える 2. まあまあ使える 3. あまり使えない 4. 全く使えない

質問8 外国人と話すとき、即座に応答できるか

1. できる 2. 多少できる 3. あまりできない 4. 全くできない

集計は質問別に5月調査と7月調査の平均値を算出し、それぞれの質問項目の平均値の差を有意水準5%で両側検定の t 検定により検討した。その結果は表1の通りであり、質問1、2、6、7において、平均値の差は有意であった。

表1 5月調査と7月調査の質問別平均値の差の検定結果

	5月調査 (n = 70)		7月調査 (n = 70)		t (69)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
質問1	2.99	.732	2.34	.720	9.51**
質問2	1.84	.715	2.37	.641	-6.770**
質問3	1.96	.788	2.06	.778	-1.625
質問4	1.36	.638	1.47	.631	-1.730
質問5	2.14	.785	2.06	.931	1.229
質問6	2.47	.607	2.33	.557	2.439*
質問7	2.19	.546	2.19	.519	.000
質問8	2.74	.652	2.46	.674	4.409**

注: * $p < .05$, ** $p < .01$

表1の結果から示唆されることは次の5点である。

- ① 質問1（外国人と話すことに自信はあるか）は数値が下がるほど自信がある傾向を示すので5月調査と7月調査の有意な変化は全体として生徒の外国人と話すことに対する自信の高まりを示すと考えられる。
- ② 質問2（外国人とのコミュニケーションに不安があるか）は数値が上がるほど不安が軽減されていることを示すので5月調査と7月調査の有意な変化は全体として生徒の外国人と話す時の不安が減っていることを示すと考えられる。
- ③ 質問6（外国人と話す時、相手を理解できるか）は数値が下がるほど理解できる傾向を示すので5月調査と7月調査の有意な変化は全体として生徒は外国人と英語で話すときに相手により理解できるようになったと自覚していると考えられる。

- ④ 質問 8（外国人と話すとき、即座に回答できるか）は数値が下がるほど即座に回答できると自覚している傾向を示すので 5 月調査と 7 月調査の有意な変化は全体として生徒は外国人と話す時に素早く回答できるようになったと判断していると考えられる。
- ⑤ その他の質問項目（外国人とのコミュニケーションが好きであるか、将来（英語を）話せるようになりたいか、留学や海外研修に行きたいか、外国人と話す時文法や語彙を使えるか）については 5 月調査と 7 月調査の平均値の有意差は認められなかった。つまりこれらの質問に対する回答傾向に変化はなかったということである。

以上を簡単にまとめるとわずか 5 回ではあったが、オンライン学習プログラムを体験することによって、全体として生徒たちは英語でのコミュニケーションに自信を深め、不安も軽減し、即座に素早く回答できるようになり、相手の言っていることもより理解できるようになったと自己評価している。このような傾向は次に述べる生徒からの感想内容とも一致する。しかし、その一方で外国人とのコミュニケーションを好きになったり、将来英語を話せるようになりたいという意欲の向上や、留学に行きたいという海外志向の向上には効果はなかったと判断できる。

5.3 成果（3） インタビュー調査での生徒の感想

オンライン授業実施中の様子から生徒の大多数は回を重ねるごとにこのプログラムに慣れ、一層楽しく積極的に取り組む様子が見られたが、全 5 回のオンライン授業が終了した後で生徒たちがどのような感想を持ったかをインタビューという形式で尋ねた。概ね生徒の感想は肯定的内容が多かった。以下に肯定的な感想を示す。

- ・楽しかった
 - ・おもしろかった
 - ・わかりやすかった
 - ・リスニングの力があがった
 - ・英会話が好きになった
 - ・もっと英語を話したくなった
 - ・外国人が好きになった
 - ・発音の違いを教えてくれた
 - ・（講師が）たくさん褒めてくれた
 - ・ゆっくり話してくれたので聞き取りやすかった
 - ・日本語ができる先生がいてくれて心強かった
- しかし否定的な感想も少数とはいえあった。
- ・緊張した
 - ・先生が無言になるのが嫌だった

- ・ずっと同じ先生ばかりで嫌だった
- ・日本語ばかり話す先生がいて英語の勉強にならなかった
- ・テキストメッセージが勝手に日本語に変換されることがあった

否定的な感想も若干はあったものの、英語でコミュニケーションすることで英語を話すことに慣れ、英語を話すことを楽しく感じるようになり、それによって英語を話すことに対する心理的抵抗感を軽減するという効果はあったと考えられる。インタビュー結果から判断するに生徒達自身もそのことを十分感じていたようである。

6. 課 題

5月に3回、7月に2回の計5回、それぞれ25分間のフィリピン人講師との appear.in を通しての1対1のレッスンを中心とする50分の英会話授業を実施した。これまで述べてきたように事前事後のリスニングテストの結果、同じく事前事後の英語学習意欲に関するアンケート調査、事後の生徒へのインタビュー調査の結果からわずか5回の授業ではあったが、それなりの効果は出たように考えられる。しかし克服すべき課題も多くある。ここでは次の2つの課題を指摘する。

(1) 学力面と実施時期について

中学2年生は教科としての英語教育を受け始めてまだ1年余りであるため、検定教科書の授業で過去形は既習、未来形は学習中、不定詞はこれからといった学習状況であった。そのためなるべく理解可能な教材を選定したが、実際にオンラインで講師側から指示を受けても語彙力と文法上の知識の不十分さ、リスニングやリーディングの能力の不十分さから理解できず、進行に支障をきたしている様子も時折見られた。小学校での本プログラム導入もあると聞くので、この時期の実施はもちろん不可能ではないと思われるが、もう少し通常の英語学習を重ねた上での実施が望ましい。

純心中学校では1月に英検全員受験を行っているため、3級以上であれば2次面接試験がある。そのためその対策として面接試験前の実施は有効と思われる。ただし2次面接はひとつのパターンが決まっているので、学習内容として英検2次試験面接の練習教材をどの程度扱うのがふさわしいのかについては検討が必要である。

(2) 実施環境について

オンライン授業実施のため、CALL室機材の調整整備が必要となり、本校のICT担当者にはネット環境の確認テストや調整、CALL室管理業者とのやり取りや業者による調整の依頼や交渉、授業開始時から安定したネット接続環境が確認できるまでの立ち会いなど、準備から実施に至るまで非常に多くの助力をいただいたおかげで、何とか5回を終了できた。本校のCALL室にはCALL

システムが構築されており、システムの安定運営のため様々な制約があり各種ソフトのアップデートなどはできず、ブラウザーもこれまではインターネットエクスプローラーのみだった。そうした事情でレアジョブ推奨の Skype は使用ができず、なんとかグーグルクロームのインストールを管理業者に認めてもらい、appear.in を利用した。当初、インターネット回線の容量の関係でスムーズなログインができず、授業開始が遅れるトラブルが続いたが、回数を重ねる中で次第に要領が分かり、appear.in へのログインを本校側で事前に行い、講師の方には後から設定時間にログインしてもらう方法が一番スムーズな方法だと判明した。今後同様のオンライン授業を実施する場合、それぞれの授業の前の授業時間帯に CALL 室を使用しない状況を作り、そこですべての生徒用パソコンで appear.in へのログインを完了してから授業を開始できるようにするのが理想的である。

7. ま と め

5月に3回、7月に2回の計5回、それぞれ25分間のフィリピン人講師との appear.in を通しての1対1のレッスンを中心とする50分の英会話授業を実施した。授業回数もわずか5回と少なく、今年度は試験的導入という面があった。しかしこれまで述べてきたように、克服すべき課題もあるものの、事前事後のリスニングテストの結果、事前事後の英語学習意欲に関するアンケート調査、事後の生徒へのインタビュー調査の結果から、それなりの効果は出たように考えられる。

純心中学校では「グローバル人材の育成」を目指してグローバル教育の充実に力を入れている。ホームステイなどの一部生徒に効果が限定される取り組みではなく、生徒全員が参加できるオンライン英会話授業は目標達成のために大いに寄与するところがある。特に心理的抵抗感を軽減し、英語の使用を楽しく感じ、さらに英語力を見つめたいと感じさせる効果は大きく、検証していないがその他の英語学習への波及効果も大きいと思われる。またフィリピン人講師と英語でコミュニケーションすることで英語の国際的広がりを体感することは、非常に重要なことである。今後も実践を積み重ね、成果を継続的に検証していく必要がある。

注

¹⁾レアジョブ

インターネット通話ソフト(スカイプ)を利用してマンツーマンの英会話レッスンを提供している企業。2007年10月設立。本社は東京都渋谷区。<http://rarejob.com/>

参考文献

- 畠山均(2017)「オンライン英語学習プログラムの成果と課題」『純心人文研究』第23号、pp 227 - 241
 姫野克也(2013)『オンライン英会話の教科書』国際語学社。

(2017年10月30日 受理)